

令和元年6月28日現在

機関番号：24506
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2015～2018
 課題番号：15K11599
 研究課題名(和文) 循環器疾患で入院した喫煙患者への看護実践(禁煙支援)能力育成プログラムの開発

研究課題名(英文) Develop smoking cessation support program for hospitalized patients with cardiovascular disease

研究代表者
 岡田 彩子 (Okada, Ayako)
 兵庫県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：10425449
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、循環器疾患で入院した喫煙患者へ有効な禁煙支援ができる看護実践能力育成プログラムの開発を目指し、その基盤を形成するために2つの研究を行った。研究1では、循環器疾患で入院した患者のインタビュー調査から、退院後から現在までの喫煙・禁煙状況と、その間に機喫煙したくなった状況と対処法を明らかにした。循環器疾患発症と喫煙の関連の重大さの認識が禁煙を継続に影響していた。研究2では、循環器病棟に勤務する看護師8名を対象に行ったグループインタビューより、看護師が行っている禁煙支援を行っているタイミング、禁煙をつながす根拠が明らかになり、実践時に困難と感ずる7つの状況が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、循環器疾患患者のケアをしている看護師の入院時の禁煙支援の実践状況を、1) 喫煙状況のアセスメント、2) 禁煙を促す実践、3) その時に難しさの視点から記述した。さらに自主的な心臓リハビリテーションプログラムに通い、かつ循環器疾患罹患での入院をきっかけに禁煙を始めた患者を対象に、入院時に禁煙を開始してから、退院後の生活の中での禁煙実施体験を記述した。一般的な禁煙支援ガイドラインではなく、循環器患者特有の禁煙開始のきっかけとそれを生活の中で継続してきた患者の体験を記述した。これらは循環器疾患の二次予防としての禁煙支援、その看護実践能力向上のための教育プログラム構築の基盤となり得る。

研究成果の概要(英文)：The aims of study were to 1) to describe the nurses' awareness of smoking and smoking cessation support for hospitalized patients with cardiovascular diseases and 2) to describe the patients' experiences of smoking cessation after discharge from hospital for the cardiovascular nurses' educational program. The strong impact for patients with cardiovascular diseases was the patient's awareness that their past smoking behavior caused to this critical ill situation. This study described the following cardiovascular nurses' practices regarding smoking cessation support: 1) timing of assessment of smoking history and smoking status, 2) utilizing techniques of motivating patients to stop smoking, and 3) difficulties of handling situation when they were implementing smoking cessation support.

研究分野：循環器看護

キーワード：循環器看護 禁煙支援 禁煙体験 看護実践

1. 研究開始当初の背景

国民医療費が年々増加する中で、一般診療医療費の中で、循環器系疾患は5兆5394億円(20.7%)と最も多く、全体の5分の1を占めている(厚生労働省、2011)。高齢化社会に伴い、国民医療費の高齢者の医療費は著しく増加しており、中でも循環器系の疾患にかかる医療費は男女共に最も多く、全体の約75%を占めている。循環器系疾患は、生活習慣との関連が非常に深く、医療費節減には、生活習慣是正に対する介入が最重要であり、主要な循環器看護実践と考えられている(American College of cardiology, & American Nurse Association, 2008)。禁煙は生活習慣に関連する循環器危険因子の中で最もリスク是正効果の高い因子である(U.S. Department of Health and Human Services, 2008; Hozawa et al., 2007; Nakamura et al., 2008; Woodward et al., 2005)。さらに禁煙による効果は、将来の心事故のリスクを減じるだけでなく、カテーテル治療や心臓手術の予後、及びその合併症発生のリスク、さらに再入院率を減じると報告されている(Hajek, Taylor, & Mills, 2002; Reid et al., 2003; Honjo et al., 2009; Iso et al., 2005; Kinjo et al., 2005)。これらの事から禁煙は最重要かつ、最優先に是正することが必要な因子であると考えられる。

全国規模の循環器疾患患者の喫煙率は明らかではないが、循環器疾患を有する30代~60歳の男性の喫煙率は40~50%台であることから、この年代の約半数が喫煙しているか、喫煙歴があると推測できる(厚生労働省:国民栄養調査, 2013)。この年代の患者層が最も多い循環器疾患患者への禁煙支援の需要は高いと考えられる。循環器疾患で入院した患者は、施設内禁煙の制度による環境的な制約や、喫煙が原因の病気で入院する体験から、約70%の心筋梗塞患者が入院期間中に禁煙を開始すると報告されている(Kinjo et al., 2005)。しかし退院後6~12か月後に禁煙継続できている患者は10~31%しかおらず、循環器疾患で入院した患者の多くは退院後に再喫煙している現状が報告されている(Fujiwara, 2005; Hasuo et al., 2005)。そのことから、循環器疾患患者への禁煙支援では、退院後にいかに再喫煙を予防できるかを支援することが最重要であると考えられる。

しかしながら、循環器疾患で入院した患者を対象にした調査では、入院中に医療者から禁煙のアドバイスを受けたという患者は、28.4%しかおらず、その職種別の内訳(複数回答可)では、医師は26.9%、看護師からは13.4%しかいなかった(Okada, 2013)。本来、循環器患者の看護において、患者の危険因子の是正のために患者の行動変容を支援することは中心的な看護ケアであるにも関わらず、看護師は、禁煙支援が必要な患者に対して、約7人に1人の看護師しか禁煙のアドバイスをしていないことになる。退院後の禁煙継続を難しくしている患者側の要因として、禁煙補助手段をほとんど使用していない現状がある。循環器疾患で入院した喫煙患者で、過去12ヵ月に禁煙に挑戦していた者は約3人に2人であり、その殆ど(98%)が禁煙の補助手段なしに禁煙を試みていた(Okada, 2013)。しかしながら、US Department of Health and Human Serviceの臨床ガイドラインによると、意志の力だけで長期間(12ヶ月以上)の禁煙ができる喫煙者は、わずか(1-3%)しかいないと報告されている(Fiore et al., 2000)。このような状況から、喫煙が危険因子となる循環器疾患で入院し、かつ原因疾患によって身体的な苦痛を体験し、禁煙の必要性を実感している患者で、さらに入院環境の制約から、禁煙を開始できている循環器疾患患者が非常に多いにもかかわらず、医療従事者の禁煙支援の実践頻度の低さから患者が適切な禁煙手段を選択できていない現状がある。

効果的な禁煙とたばこ依存症治療の科学的根拠の文献検討から、行動療法と薬物療法は、たばこ依存症の治療に大きな効果があると報告されている(Fiore et al., 2000)。また「禁煙」を循環器疾患の一つの治療と考えると、副作用のない、費用対効果の高い治療法であると多く報告されていることから、WHO(2003)はすべての医療従事者や医師が患者に対して常に禁煙介入を行うべきだと提唱している。

しかしながら本邦の循環器疾患と喫煙に関する研究の多くは、疫学的研究で、喫煙を続けた場合と禁煙をした場合の死亡率、有病率を明らかにするものが殆どであり、循環器疾患で入院治療を受ける患者の喫煙パターンに関するエビデンスの集積は、あまり行われていない。このような背景から、日本人の循環器疾患患者を対象として、上記の喫煙・禁煙の関連因子を検証し、日本人循環器疾患の喫煙患者の特性を明らかにすることが必要であると考えられる。さらに、看護師の禁煙支援の現状と課題を明らかにし、循環器看護実践の一部としての禁煙支援の充実に向けた看護師の禁煙支援能力育成プログラムの開発が必要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、循環器疾患で入院した喫煙患者へ有効な禁煙支援ができる看護実践能力育成プログラムの開発の基盤となる知識構築のために、以下を明らかにする事を目的とした。

循環器疾患で入院し、入院中に禁煙を開始した対象の退院後の禁煙継続に関する体験や思いを記述する

循環器病棟に勤務する看護師の禁煙支援実践と実践する際に存在する困難感や、遭遇する困難な状況を記述する

3. 研究の方法

研究 循環器疾患で入院し、入院中に禁煙を開始した対象の退院後の禁煙継続に関する体験や思いを記述する

対象

維持期心臓リハビリテーション終了後に自主的に運動療法を行う対象支援を行う場を提供している施設利用者3名を対象に実施した。対象は、循環器疾患での入院をきっかけに禁煙に挑戦した経験があり、今までに半年以上禁煙継続した経験のある者とした。

インタビュー内容

心臓の病気を指摘されてから今までの経過、入院期間中の喫煙や禁煙に関する支援や指導の内容と、医療従事者の種類、今までの禁煙に挑戦した経験と失敗された経験について、インタビューガイドを用いて個人にインタビューを実施した。インタビューは対象の許可を得て、ICレコーダーに録音した。

分析

インタビューから逐語録を作成し、病気の経過を記述する。その後禁煙への挑戦に関連する内容の記述を抽出し、質的に分析した。対象ごとの記述を統合し、循環器疾患の対象の回復と予防に向けた禁煙に向けた経験のパターンを記述した。

研究 循環器病棟に勤務する看護師の禁煙支援実践と実践する際に存在する困難感や、遭遇する困難な状況を記述する

対象

施設内禁煙の取り組みをしている日本循環器学会認定の循環器専門医が勤務する施設の循環器病棟【内科・外科】で勤務する看護師に、4名から5名のグループで、合計24名を対象にインタビューを実施した。対象は看護師としての勤務経験が3年以上あり、かつ循環器病棟の勤務経験が1年以上ある者で、管理職、認定看護師や専門看護師等の資格認定を受けていない者とした。

インタビュー内容

ケアを提供する際に患者の喫煙状況について気にかけているか、またそれはどんな場面の時か、患者と喫煙や禁煙について話をするところがあるか、またそれは、どのような時か、喫煙や禁煙について患者と話をする場合、どのような内容の話をするか、患者教育を行う際に自分に不足していると思うこと、必要な知識について、一グループ4~5名のグループを実施した。インタビューは対象の許可を得て、ICレコーダーに録音した。

分析

インタビューから逐語録を作成し、発言の意図や文言に含まれる意味を読み取り、喫煙状況のアセスメントのタイミングとアセスメント内容、視点で分析した。分析の妥当性を高めるために、調査および分析は複数の研究者が行った。

病気の経過を記述する。その後禁煙への挑戦に関連する内容の記述を抽出し、質的に分析した。対象ごとの記述を統合し、循環器疾患の対象の回復と予防に向けた禁煙に向けた経験のパターンを記述した。

4. 研究成果

研究 循環器疾患で入院し、入院中に禁煙を開始した対象の退院後の禁煙継続に関する体験や思い

循環器疾患で入院体験があり、入院中から禁煙を開始した対象の退院後の禁煙継続に関する体験を記述するために、3名の対象(60代男性)で、急性心筋梗塞および弁膜症の既往ある対象であった。インタビュー平均時間は、26分であった。内容分析の結果、禁煙を始めたきっかけは、

自身や近親者の心筋梗塞や脳血管疾患の発症による集中治療を受ける体験、発症と喫煙の関連の重大さの認識であった。「痛切に感じる」従事者(集中治療室看護師、担当医、執刀医)による、異なる場面での(病状説明や退院後生活に関する説明)複数回アドバイスを受けたことが禁煙を決意する要因となっていた。

退院後の生活の中で喫煙したい状況については、「休憩時に、たばこ飲み物(コーヒ)というができないとき」、「外出する際に財布、携帯、たばこ、ライターをポケットに入れる、これがなくなる、忘れ物をしている気持ちになる」、「朝起きた瞬間から吸っていた、このペースを崩すのは非常にきつかった」等から、「『通常のセット』ができないとき」があげられた。

またその時に行っていた対処行動については、「飴をなめる、ニコチンガムを食べる、水を飲む、スーッと物を入るといえるのは、自分には、あまり意味がなかった」等から、「一般的な対処法は、自分には有効ではない」があげられた。

禁煙継続に必要なことに関して、対象者が認識していた禁煙成功につながるものは、「自分自身の精神的な強さ」、「再発への恐怖」、「自らの強い意思」であった。

研究 では、循環器病棟に勤務する看護師 24 名を対象に行ったグループインタビューの内容を分析し、看護師が行っている禁煙支援の実態と実践上の困難感の内容を明らかにした。記録単位数(n = 235)のうち、患者の喫煙状況を気に掛けるタイミングとして、1)入院時の情報収集時、及びその情報に喫煙の記載があるとき、2) 虚血性の心疾患の診断および治療を受ける対象であるとき、3)パンフレットを用いた説明のとき、4) 煙草のおいがしたとき、煙草を見かけたとき、5) 患者が喫煙に関する話を話してきたとき、6) 心臓病教室のとき、7) 認定看護師からのアプローチ、8) 医師の病状説明後、の 8 つのタイミングが抽出された。

禁煙や喫煙に関するアプローチの際に活用する理由付けは、1) 再入院や再発を予防するため、2) 家族のため、3) 一般的な喫煙の害、心臓や血管への負担の情報提供、4) 対象の喫煙パターンのアセスメントに基づいて、5) 危険因子の一つとしての禁煙であった。禁煙支援の際に困難と感じる状況や場面は、1) 自覚症状・病識がない対象へのアプローチ、2) 現在の病状と喫煙の関係がない対象へのアプローチ、3) 対象が納得できる言葉にして説明できない場面、4) . 医師の指示は従うが、看護師の言うことは聞かない対象へのアプローチ、5) こだわりが強い対象へのアプローチ、6) 対象からの反論・クレームを受けた場面であった。このような場面での看護師に気持ちとして、1) 好きなものをやめるという躊躇、うしろめたさ、2) 患者から嫌な表情をされたときの躊躇、3) 対象からの反論・クレームに対する不安、4) 自身が対象(喫煙)の気持ちかわからない、が抽出された。

結果からの示唆

研究 における禁煙を始めたきっかけや禁煙継続に関することから、一般的な禁煙支援の内容に含まれる禁煙への動機付けやステージ理論等の枠と異なる禁煙開始の状況であり、かつ禁煙を継続するために必要であると対象が認識していたことは、自らの精神力や意思の強さであり、患者自らの能動的な禁煙に対する意思の変化であった。これらから循環器疾患の発症と治療の経過における患者の心理・精神的状態の経過の特性を考慮した禁煙支援が必要でないかを考えられる。

研究 において、「困難と感じる状況や場面」で遭遇する対象へのアプローチで示されるように、標準化された枠を超えたアプローチが必要な対象に対応する看護師の技術や知識が必要なのではないかと考えられる。さらに「看護師の気持ち」において、対象の気持ちを尊重するがゆえの躊躇や、葛藤を体験していることが示されたことから、今後の看護師が禁煙支援を実践する能力を培うにあたり、看護師独自の対象アプローチの観点を考慮した教育内容の検討が必要であると考えられる。

以上より環器疾患で入院した喫煙患者へ有効な禁煙支援ができる看護実践能力育成プログラムの開発の基盤となる知識構築のために必要なことは、循環器疾患患者の緊急・急性期治療における対象に心身の状況に合わせて展開していくこと、リスクファクター是正に向けた喫煙行動の是正および行動の再構築においてキーとなる要素は、患者自らの能動的な禁煙に対する意思の変化であることが明らかになった。それを支える看護師育成の要素として、看護師独自の対象理解のアプローチから生じる躊躇や葛藤があることから、それらのマネジメント技術も盛り込んだ教育内容の検討が婚後必要であることが示唆された。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

Ayako, Okada, Disease prevention and management for patients with cardiovascular diseases in disaster and a framework of cardiovascular nursing based on the emergency response stage, The 5th Research Conference of World Society of Disaster Nursing, Bremen, Germany 2018

Ayako, Okada, Nursing intervention for smoking cessation for patients with cardiovascular diseases -a literature review-, 4th International Conference in Cardiovascular - Thoracic Nursing 2017, Vietnam, Dec, 12-13, 2017.

Ayako, Okada, Kazuyo, Okumura, Nursing practice on smoking cessation for hospitalized patient with cardiovascular diseases in Japan, 44th Biennial Convention, Honor Society of Nursing, Sigma Theta Tau International, Indeanapolis, Indiana, USA. 2017-10-28 – 2017-11-01

岡田彩子, 奥村和代, 竹原歩, 稲垣美紀: 循環器病棟に勤務する看護師がとらえる喫煙行動と禁煙支援の実態 第一報、第 81 回日本循環器学会学術集会、2017-03-17 - 2017-03-19

藤永瑛美, 岡田彩子: 保健信念モデルを用いた壮年男性管理職における虚血性心疾患発症因子は

〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名： 稲垣美紀 (梅花女子大学看護学部 准教授)

ローマ字氏名：INAGAKI Miki

所属研究機関名：摂南大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 60326288

研究分担者氏名： 奥村和代

ローマ字氏名：OKUMURA Kazuyo

所属研究機関名：兵庫県立大学

部局名：看護学部

職名：助教

研究者番号(8桁): 20755805

研究分担者氏名： 竹原歩

ローマ字氏名：TAKEHARA Ayumu

所属研究機関名：兵庫県立大学

部局名：看護学部

職名：助教

研究者番号(8桁): 30733498

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。